九州教育学会研究紀要　第29巻　2001　203－210頁

旧制熊本中学の校風の確立

――歴代校長の教育方針を中心に――

渡　辺　一　弘

Ⅰ．問題の所在

明治期に開校した我が国の旧制中学は，その源流を藩校や私塾にまで遡ることのできる伝統あるエリートのための教育機関で，質実剛健を旨とするような学校も多かった。例えば荒巻（1990，81-84頁）は，福井藩藩校明道館を源流とする福井中学（＊明治15年開校）[1]の事例を挙げて，「旧制中学では，その設立の歴史的背景や，戦前の特異な社会的雰囲気もあって，質実剛健を校是とする学校が多かった」と指摘している。また塚野（1998，81頁）も神戸一中（＊明治29年開校）の事例を挙げ，校訓が質素剛健であったという昭和初期の卒業生の回想を紹介している。このように明治期に開校した旧制中学の伝統校の校風は，一般に質実剛健，剛毅木訥として語られる。

しかし明治期に開校した旧制中学の中には，質実剛健型以外の校風の学校も存在した。例えば岡山一中（＊明治７年開校）は，中国地方で最初に開校した古い伝統を誇る公立中学であり，校訓の文言には「質素」「剛毅」といった言葉が出てくる。しかし，学校における教育の根本精神としては「自主独立」や「自主自立」「自主自律」等々が校訓と認識されており，戦後引き継いだ新制高校においても「自主自律」が岡山一中時代から現在も生徒の精神的支柱になっている，と学校関係者も指摘している[2]。このように古い伝統を誇る旧制中学において，「質実剛健」スパルタ型の学校――主に軍隊式に生徒の学業からその他の学校生活に至るまで，肉体的にも精神的にも鍛え上げるような学校――と共に「自主自立」リベラル型の校風を誇る学校――比較的生徒の自主性を重視し，生徒を大人や紳士として扱うような教育を行う学校――も存在していたのである。

本稿では，明治期に開校した旧制中学でリベラル型の校風を誇る学校として旧制熊本中学（＊明治33年開校，現熊本県立熊本高等学校）の事例を取り上げて，歴代校長の教育方針に焦点を当て同校の校風の確立を，校長に関する評伝・学校史・卒業記念誌等の記述資料を用いて，スパルタ型の学校や同時期開校の県下の旧制中学の状況とも一部比較しながら検討することを目的とする。

熊本中学を事例として取り上げる理由は，同校がスパルタ型の先発校，熊本県尋常中学済々黌（＊明治15年創立）から分離独立した後発校であり，先発校との比較検討が可能であることと，明治32年の中学校令改正（第二次）を受けて，明治30年代は旧制中学の増設期[3]であり，この時期に開校した中学の一事例として同校をを捉えることができるからである。

従来旧制中学の学校文化に関する研究は，明治初期の学校設置に関する研究を除いては教科のカリキュラムに関する研究（例えば，野地 1979），自治活動に関する研究（例えば，山下・千葉　1989），戦時下の生徒に関する研究（例えば，疋田　1990）といったものは見受けられるが，学校の「校風」や「伝統」に直接的に関係する研究は，学校時代の回想録の類を除くと非常に少なく，また二見（1993）が検討したように地域の中等教育史の一環として校長の教育者像に注目し，学校の史的発達や地域の文教的風土を明らかにしようとした研究は見られるが，校長と校風の形成の関係を主軸に検討した研究はあまり見られない。先に示した校風の違いは，戦後も後身の新制高校に引き継がれている場合

が多いと云われており，旧制中学の校風を問題にすることは，旧制中学の伝統を引き継いだ新制高校における学校文化の形成に果たした機能をみるうえで重要であり，戦後の地域における高校の評価，学校間格差の現状を検討する鍵になり，これらの点から本研究の意義が見出せる。

なお本稿で用いている「先発校」「後発校」という言葉は，明治32年の中学校令改正（第二次）以前に開校した旧制中学を「先発校」，それ以降に開校した旧制中学を「後発校」と定義した。さらに後発校の中で，大正８年の中学校令改正（第三次）以前に開校した旧制中学は「地域先発校」と定義する。これは，時期的に後発校として開校した場合でも，地域においては最初に開校したり，「一中」という名称が付けられている学校もいくつかあり，地域における先発校として存在している状況を考慮したためである。

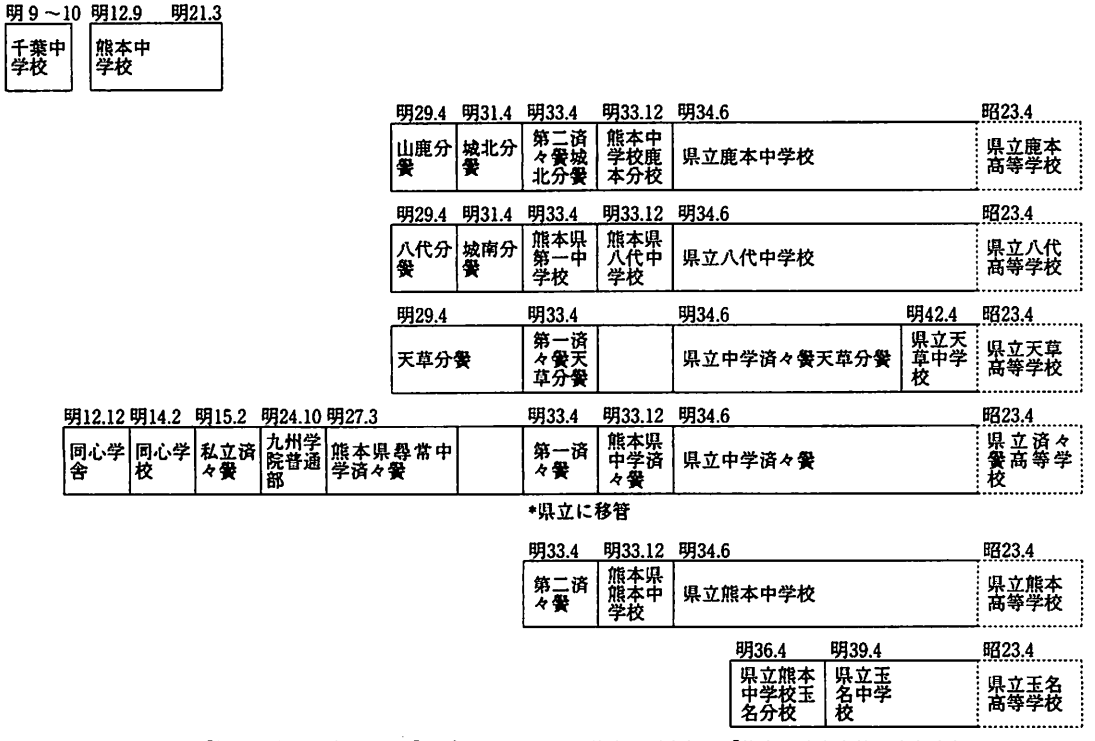
II．旧制熊本中学と歴代校長

(1)　旧制熊本中学と熊本県下の旧制中学の概観

本稿では，リベラル型の校風をもつ旧制中学の事例研究として旧制熊本中学（以下熊中と略記）を取り上げる。熊中は熊本県下でもっとも古い伝統を誇る済々黌中学（以下済々黌と略記）から分離独立した学校であり，両校はその成立事情から「一幹両枝」の兄弟校であるが，校風は質実剛健でスパルタ型の済々黌に対して，熊中は誠実勤勉でリベラル型であるという[4]。両校は戦後新制高校になってからも旧制中学の校風を引き継いでいると地元では知られている。

戦前の熊本県下の旧制中学の状況を簡単に概観すると，熊本県下の旧制中学の源流は，佐々友房らによって設立された同心学舎を母胎として明治15年に創立された済々黌にあるといえる

表１　明治期開校の熊本県下公立旧制中学の発展過程



出典：『熊本県大百科事典』，『トピックスで読む　熊本の歴史』，『熊本県公立高校二十年史』，『教育熊本の伝統―新教育立県のヒント―』，『キナ線100年　済々黌人物誌』，『熊中・熊高百年史　上・下巻』より作成

（表１）。この学校は元は天皇中心，国粋主義を唱える紫溟会（後の国権党）の純然たる教育機関として誕生し，皇室中心主義を標榜し国士養成を主眼にしたバンカラな精神教育を誇っていた[5]。済々黌は私学であったが，県立へ移管する前の明治27年に県立中学校と同一に認められ，県が管理することになった[6]。明治29年には入学者増に伴い，山鹿・八代・天草の各地域に三分黌を設置。明治33年に済々黌は生徒数が1400人に達したので，熊本県中学第一済々黌（800人）と同第二済々黌（600人）に分かれた[7]。同年末に済々黌は県立中学校となり，翌明治34年に第一済々黌は熊本県立中学済々黌，第二済々黌は熊本県立熊本中学校と改称された。同時に山鹿・八代・の各分黌もいくつかの改称を経て，それぞれ県立の鹿本中学校・八代中学校となり，少し遅れて天草分黌も県立天草中学校になった。また明治34年に熊中の分校として設立された玉名分校も，明治39年に独立して県立玉名中学校となった。このように明治期開校の熊本県下の公立中学校６校は，すべて済々黌から枝分かれして発展していったのである。その後大正に入り，大正10年に宇土中学が開校し，ついで御船・大津・人吉の順に毎年１校ずつ計４校が開校して，旧制の公立中学校は全部で10校，私立中学校は鎮西中学校と九州学院の２校であった[8]。

(2) 歴代校長

熊中の校長は，初代の野田寛から第５代の大西嘉幸まで計５人が就任している。なお大西は新制高校移行期に当たり，熊本高校の初代校長も務めている。本稿では初代校長野田と第３代校長福田源蔵に焦点を当てて分析を行う。これは学校開校時の校長で校訓を制定し，学校の教育方針を示した初代校長野田（在任25年）と，学校史等で同校の飛躍発展期，校風の確立期と見なされる第３代校長福田[9]（在任17年３ヶ月）焦点を当てて検討することで，熊中時代48年間の大部分の時期の校風をみることができると考えるからである。

野田と福田の簡単な略歴を学校史と二人の評伝から以下に示しておく。野田は慶応２（1866）年熊本市七軒町に生まれる。明治15年済々黌に入学，二級生（*当時の最上級）に編入，18年済々黌卒業，翌年上京し東京英語学校入学，英語を専修し，22年帝国大学（後の東京帝国大学）哲学科入学。26年卒業と同時に熊本に帰り，済々黌教諭となる。33年第二済々黌のち熊中の初代校長に就任。大正14年３月退職，退職後隠棲。昭和29年５月16日逝去，享年89歳。熊本県近代文化功労者。熊日社会賞受賞。

福田は明治14（1881）年熊本県宇土郡前越村（現三角町）に生まれる。25年中尋常小学校卒業後同校准訓導心得として11歳で同校に勤務，二年後准訓導に任ぜられる。その後32年熊本師範学校に入学し，36年３月熊本師範学校卒業，卒業と同時に宇土郡青海高等小学校訓導に任用。二年後上京し，東京高等師範学校地理歴史科入学，42年３月東京高等師範学校卒業，直ちに同校付属中学校嘱託となる。翌43年同校研究科に進み，倫理教育学を専攻，44年卒業，簡抜されて母校助教授に就任。大正３年新潟県立新発田中学校教諭，６年佐賀師範学校教諭，同校付属小学校主事。８年新潟県立新発田中学校校長，その後同県立高田中学校校長，同県立長岡中学校校長を歴任。昭和２年６月熊中第３代校長に就任。19年７月退職。戦後，私立熊本第一工業高等学校校長に就任。昭和49年１月３日逝去，享年92歳。熊本県近代文化功労者（以上略歴は『熊中熊高八十年史』，『熊中・熊高百年史　上・下巻』，『新版　野田寛先生伝』，『福田源蔵先生伝』を参照）。

Ⅲ．初代校長野田寛の教育方針と校風

熊中創立十年記念日の明治42年４月に，野田は自ら長い年月をかけて考え抜いた教育理念を校訓として定め，その中核として「士君子」教育を打ち出した。校訓が開校時ではなく，創立十周年記念日に発表された経緯は，本田（1985, 67-68頁）によると，「かねて済々黌教育改革の意思を抱いていた野田校長としては，両校の分離はその抱負を実現する絶好のチャンスであったであろうが，それかといって分離直後に着手することは，たとえ恩師佐々（*佐々友房，済々黌の創立者で同校の第２代校長）の示唆にもと

づくことが大であるとはいえ，母校済々黌に対する義理の上からも，しばらく差し控え，その間慎重に研究と討議を重ね，教師を説得して機会を待っていたのである。（中略）そして，明治三九年九月，佐々は東京で急逝し，野田の教育改革の機はいよいよ熟し，（後略）」であるという。また『熊中・熊高百年史　上巻』によると，野田は「しかし済々黌の三綱領にある「元気を振い」という校是を拡大解釈したバンカラ・暴力是認・野武士的雰囲気等には在学中から強く反発し，改革の必要性を痛感していたという」[10]とあり，かなり早い時期から，済々黌型の質実剛健的なバンカラな校風とは異なる校風を熊中に求めていたことが伺える。この点に関しては『新版　野田先生伝』においても，野田が済々黌在学中に「(略)ただ先生が入学されて一年位して，克堂先生（*克堂は佐々友房の号）が盛んに生徒の元気振作を図られた頃から，生徒の間に強きを恃んで弱気を凌ぐ風が萠して来たことについては，多少の遺憾を感じておられた」[11]との指摘があり，その結果，「(略）従来の済々黌の教育方針の美点はそのまま踏襲し，更に，これに磨きをかけた教育をを施すことを期して，その標準を「士君子養成」という点に置かれた」[12]という。ただ熊中14回（大正３年）卒で元熊中教頭の野田糾夫が，直接野田に校訓の成り立ちについて話を聞いてまとめた「熊中校訓物語」によると，「然しこの（*熊中の）君子的教育は決して済々黌の豪傑的教育の反動的所産ではない。「士君子」という語の中にはかなり豊富に済々黌の精神が取り入れられているのである。即ち我が古来の武士道的精神を重んじ，その精神を現代に如何に表現すべきか，如何に実行すべきか，という事が先生の苦心せられたところであるから，其の根本的精神に於ては何等変りはないのである。唯其の精神を運用するに至っては現在になお見られる如き対蹠的傾向をとったのである」[13]とあり，熊中の済々黌とは対照的な校風も，その根底に於いては等しい物であると指摘している。以下に校訓の全文を挙げる。

「凡ソ本校ノ生徒タル者ハ教育ノ聖勅ヲ奉体シ，戊申ノ大詔ヲ格守シ，誠実心ヲ秉リ，禮敬身ヲ持シ，善ヲ為スニ勇ニ，過ヲ改ムルニ敏ニ，己ニ克チ慾ヲ制シ，身體錬磨シ，艱苦ニ忍耐シ，専ラ修学ニ勤メ，敢テ小成ニ安ンズルコトナク，日夜滓礪シテ士君子タルノ修養ヲ完ウシ，國家ノ忠良タルコトヲ期スベシ。此志ヲ堅持シテ移ラザル之ヲ立志ト謂ヒ，此志ヲ實行シテ倦マザル之ヲ篤行ト謂フ。諸子其レ立志篤行，以テ本校教育ノ主旨ニ副ヘヨ」（下線筆者）[14]

下線の「士君子」とは教養もあり人格も優れた紳士の意であり，野田が学校を経営するに当たっての目標が，この「士君子」の養成であり，この目標を達成するために「立志篤行」を説いたとある。なお最初の「聖勅」とは言うまでもなく教育勅語のことである。この「士君子」養成の教育は，前出の佐々が欧州視察の際，英国のイートンスクールにおける紳士養成教育に感銘を受けた，という話に野田がヒントを得て，英国のジェントルマン教育の方法に，東洋的儒学の精神を加味したものだと伝えられている[15]。また野田は生徒の修学の方法において，詰め込み主義を排して自学の精神を養い伸ばすことも期待していたという[16]。

校訓の中核にある「士君子」という言葉は，熊中・熊本高校の学校史，校友会誌，卒業記念誌等々において数多く見られ[17]，同校の校風と校長の教育方針を検討するうえでの重要なキーワードである。校訓が定められたのが明治42年なので，明治期の卒業生の回想には直接「士君子」という言葉が出てくることは少ないが，大正期以降の卒業生の回想には，以下のようにたびたび出てくる。例えば大正４年の卒業生は，在学中の思い出を生徒会誌に寄稿して，「私のこの永い教員生活の中に私が意識し得ざるまま，熊中の士君子の血の流れがどこかに滞在して居たかも知れない」[18]と最後を結んでおり，熊中の校風の中核を為す精神，といった意味で「士君子」という言葉を用いている。また昭和15年の卒業生は，「熊中の教育理念の一つに「士君子」というものがあった。「校訓」にもうたわれているが，熊中生なら耳にタコができるくらい聞かされた言葉である。（中略）「文武両道」

表２　熊本中，済々黌，鹿本中，玉名中の教育方針・目標の比較

	教育方針・目標	特　　色
熊本中	英国紳士型の人間形成を範とし，「士君子」の養成を目指し自主自立，立志篤行の精神	ジェントルマン教育，武よりも知と徳を目指す人格の修得に重きを置くもので，「自主・自学」の精神の強調，リベラルな校風
済々黌	「正倫理明大義」「重廉恥振元気」「磨知識進文明」の三綱領による徳育・体育・知育の三徳併進の理想，全人教育を目標とし，人間形成重視	反骨精神，愛校心による一致団結，同窓生の縦横の絆が強く，質実剛健・スパルタでバンカラな校風
鹿本中	「忠孝」「礼節」「勤労」の三綱領による国士の育成を建学の精神とし，質実剛健，不屈不撓の不動魂を養成	質実剛健，不撓不屈の開拓精神で身体の鍛錬，学力の向上を目指す，スパルタ教育の校風
玉名中	「至誠」「剛健」「進取」の三綱領による理想への邁進，自学自習・勤労の習慣を養い，教養高き地方青年の養成	国家有用の人物の育成と共に地方文化の進歩に貢献する教養人の育成，質実剛健ではあるが，大らかな校風

出典：『熊本県大百科事典』，『熊本県公立高校二十年史』，『熊中・熊高百年史　上・下巻』，『済々黌百年史』，『玉名高校七十年史』，『鹿中の青春　還暦記念44回・45回生の記録』より作成

といってしまえば分かり易いが，どうもそういう通俗的なものではないらしい。士（さむらい）としての孤高の志が含ませられていたのであろう。熊中生にこの語が受けたのは，それが一種のエリート主義につながったからではなかったのかと今にして思う」と回想している[19]。もっともこの「士君子」の解釈については，太平洋戦争中の在学生は，「武人としての君子，立派な武人になれ，というように説明された」と回想していて[20]，当然のことながら，その当時の社会状況にも少なからず影響を受けているようである。

表２は参考として，後発校熊中，先発校済々黌，済々黌の分黌鹿本中，熊中の分校玉名中の教育方針・目標を比較し，その特色をまとめたものである。具体的には「教育方針・目標」は，学校史や卒業記念誌等の校訓や教育方針に関する記載事項をそのまま引用し，「特色」は，それらについての説明をまとめたものである。熊中のみが，教育方針・目標に質実剛健的なニュアンスの言葉が含まれないのに対して，他の３校には質実剛健的な気風と国家にとって有用なる人物の育成の雰囲気が感じられる。

以上初代校長野田の教育方針から，熊中の明治末から大正期にかけての校風を検討すると，先発校済々黌の質実剛健型とは異なる，誠実勤勉な紳士型の校風を作ろうとしていたことがわかる。ただし，その校風の根底には済々黌の持つ武士道的精神の重視といったものが流れていたとの指摘もあり，済々黌の美点と考えられる部分は踏襲していたようである。だがその校風は，概して済々黌はもとより，他の済々黌の分黌や他の後発校とも異なる特異なものであったといえる。

Ⅳ．第３代校長福田源蔵の教育方針と校風

前任の第２代校長武田雄三が，僅か在任２年１ヶ月で済々黌黌長に転出したのに伴い，昭和２年６月に福田が第３代校長に就任した。福田は多くの改革を行い，福田の校長時に熊中は全国的な名門中学として名をとどろかせたという[21]。学校史と福田の評伝からみてみると，先ず校長就任後の最初の仕事として制服の改革を行っている。これは生徒に自信と誇りを持たせ

るためで，新潟の前任校での経験に基づくもので，制服のそで口に白黒二線のレースを縫いつけ，先発校済々黌の黄筋に対し熊中を強調して成功を収めたという[22]。なおこの白線は今日に至るまで引き継がれている。

次に同じく新潟時代の見聞に基づき，後援会を発足させ校運隆盛に努めた。更に創立三十周年記念事業として，本格的な学校図書館の建築，戦前には珍しい県内唯一の公認の五十メートルプール造成，校地拡張，体育館・校舎の増改築等の諸整備を行った。

また上級学校への進学率上げるために，第一回卒業生の卒業と同時に設置された補習科の内容を充実させ，当時としては珍しい担任制を採用し，本科生と同様体操教練・作業などを課し，その評判は他校はもとより，県外にも広がったという[23]。

一方で福田は，生徒の心身鍛練にも力を注いだ。元々柔道好きであったこともあり，生徒全員に必修科目として柔剣道を課した。特に柔道に関しては，福田の校長就任と前後して京都の武徳専門学校から柔道界で有名な指導者を招聘しており，熊中柔道部は県大会，九州大会で優勝するまでになった。そしてその柔道部の猛者の中から，当時難関とされた海兵や陸士，旧制高校に現役で合格する者も続出し，文武両道が達成されたという。また毎日（第二時限後）業間体操を特設して，真冬でも自ら上半身裸になって汗を流したという。

学校経営については，特に職員組織について慎重であり，校内に学閥的弊風が生じるのを嫌い，同一学校出身の職員を多用しない主義で，国公私いずれを問わず多くの学校出身者を採用し，互いに切磋琢磨させたという（以上『熊中熊高八十年史』，『熊中・熊高百年史　上・下巻』，『福田源蔵先生伝』を参照）。

以上みてきた福田の教育方針により，熊中の士君子イズムは確立した，という卒業生の指摘は多い[24]。実際この時期，上級学校への進学率は県下で圧倒的に１位を占め[25]，柔道を始めとする運動部の成績も急激に上昇し，学校の施設等の充実度も県下で有数のものとなった。そして福田の校長時代には，「天下の熊中」という言葉も使われ始めた。例えば昭和４年から９年まで在任した国漢教諭の峯岸義秋は，「その頃は，よく「天下の熊中」という言葉が使われたものである。それは上級学校入学試験やその他で張り合っていた済々黌などを問題とせず，天下第一の中学校となるという意味が多分に含まれていたように思う。三十周年の記念式の頃にはよく言われていた言葉である」と回想している[26]。また昭和11年に着任した数学教諭の広永政太郎（*済々黌出身）は，着任当時の喜びの中で，「（略）熊中には未知数の魅力や自由度があり，済々黌と競争してまでなどケチなことをせず，いつも「天下の熊中」というのが学校の方針と聞いていたから，そのスケールの大きさに喜んだものであった」と回想している[27]。

以上第３代校長福田の教育方針から，熊中の昭和初期の校風を検討すると，この時期は学校史や卒業記念誌等の記述から検討してきたように，初代校長野田が掲げた「士君子」教育の知育の部分はもちろんのこと，体育の部分でも大いに発展して，熊中の誠実勤勉な紳士型の校風が確立した時期であったといえる。

Ⅴ．まとめ

以上旧制熊本中学の事例を取り上げて，初代校長野田寛と第３代校長福田源蔵の教育方針に焦点を当て，リベラル型の同校の校風の確立を，校長に関する評伝・学校史・卒業記念誌等の記述資料を用いて，スパルタ型の学校や同時期開校の県下の旧制中学の状況とも一部比較しながら検討を行った。その結果，以下の３点にまとめられる。

1．熊本中学のリベラルで紳士的な校風の萌芽は，初代校長野田が済々黌在学中，在職中から既に済々黌型のバンカラな校風への反発として抱いていたものであり，それを熊本中学開校の際に求めたものであるが，その校風の根底には先発校済々黌の持つ部分も一部受け継がれている。

2．熊本中学のリベラルで紳士的な校風の発展

と確立は，第３代校長福田の教育方針とその政策によるものであり，それは上級学校への進学率の上昇やクラブ活動における活躍から見てとれる。

3．熊本中学の教育方針・目標は，済々黌の他の分校や熊本中学の分校から分離独立し，同じく明治30年代の旧制中学の増設期に開校した玉名中学と比較しても特異なものである。

今回の分析で不十分であった同時期開校の県下の旧制中学の状況との比較検討と，旧制中学の校風を検討するうえでの尺度の検討を今後の課題としたい。

註

（1）神辺靖光「藩学から明治の中学校への連続性に関する考察」『国士舘大学　人文学会紀要』№18，1986，1-20頁。

（2）曽我英二「「'125今から未来へ」―岡山朝日高校創立125周年記念美術展―」『烏城』第157号　岡山県立岡山朝日高等学校，2000，28頁。

（3）旧制中学の数は，明治28年の96校から明治38年の271校へと，この時期約３倍近く増加している（伊藤　1990，311頁）。

（4）岩本　税・水野公寿編　1994，210頁。

（5）熊本日日新聞社　1982b，20頁。

（6）同上　27-28頁。

（7）前年の中学校改正令によって，一校の定員が最高800人までとなったため。なお分け方は，本人の希望，通学区域などを加味して慎重に行われたが，期せずして第一済々黌は　豪傑型が多く，第二済々黌は温順派が多く，このため後の両黌に性格的にはっきりした差が出たという（西日本新聞社　1972a，147-149頁，同社　1972b，8-10頁）。

（8）熊本日日新聞社　1982a，555頁。

（9）熊本高等学校　1986，253頁。

（10）同上　2000，27頁。

（11）熊本県立熊本高等学校江原会　1987，225頁。

（12）同上　227頁。

（13）「熊中校訓物語」は，『江原 16　創立80周年記念号』に寄稿された文章であるが，元々は昭和10年５月当時，九州新聞主幹高木亮氏（熊中８回（明治41年）卒）の依頼によって，当時隠棲していた野田に，一週間に亘り校訓の成り立ちについての話を直接聞いてまとめたものであるという。

（14）前掲書　2000，36頁。

（15）前掲書　1987，226-227頁，前掲書　1994，212-213頁。

（16）前掲書　1986，154-156頁。

（17）戦前はもちろんのこと，戦後新制高校に移行してからも「士君子」という言葉は，学校の生徒会誌等に見られる。例えば，昭和56年に発行された，先に触れた『江原 16　創立80周年記念号』では，一般の在学生10人の随想において３人が，「士君子」という言葉を出して，具体的に学校生活について言及している。

（18）熊本県立熊本高等学校　1961，53頁。

（19）熊中昭和十五年四十回卒二金会　1995，86頁。

（20）小堀富夫　1995a，42頁。

（21）前掲書　2000，57頁。

（22）同上　59頁。

（23）補習科への入学者は，県内の卒業生だけではなく，北海道から沖縄までいたという（前掲書　1986，264頁）。

（24）例えば，昭和18年卒業生の指摘（長野吉彰　1994，31頁）。

（25）文部省『全国中学校ニ関スル諸調査』各号を用いた筆者の算出によると，昭和８-10年，11-13年の熊本県下中学校の「高等学校及大学予科入学者数（中途退学者含）」上位３校は，前者が熊本116人，済々黌51人，人吉23人で，後者が熊本85人，済々黌32人，鹿本27人である。

（26）「福田源蔵先生伝」刊行会編　1991，225頁。

（27）前掲書　1995，33頁。

熊本県関係の参考文献・資料

（1）「福田源蔵先生伝」刊行会編『福田源蔵先生伝』1991。
（2）本田不二郎『教育熊本の伝統―新教育立県のヒント―』熊本壷溪塾，1985。
（3）岩本　税・水野公寿編『トピックスで読む　熊本の歴史』葦書房，1994。
（4）小堀富夫『シリーズ・私を語る　わが一期一会』熊本日日新聞社，1995a。
（5）熊中昭和十五年四十回卒二金会『県立熊中卒業五十五年記念誌』1995。
（6）熊本県公立高校二十年史編集委員会『熊本県公立高校二十年史』熊本県公立高等学校長協会，1969。
（7）熊本県立熊本高等学校『江原　創立六十周年記念号』1961。
（8）―――『江原 16　創立80周年記念号』1981。
（9）―――『熊中熊高八十年史』1986。
（10）―――『熊中・熊高百年史　上・下巻』2000。
（11）熊本県立熊本高等学校江原会『新版　野田先生伝』1987。
（12）熊本県立済々黌高等学校『多士　創立九十周年記念号』1973。
（13）―――『済々黌百年史』1982。
（14）―――『多士　創立百周年記念号』1983。
（15）熊本県立玉名高等学校『玉名高校七十年史』1973。
（16）熊本教育振興会『肥後の人物ものがたり』1988。
（17）熊本日日新聞社『熊本県大百科事典』1982a。
（18）―――『キナ線100年　済々黌人物誌』1982b。
（19）―――『新・九州人国記　熊本県編』1984。
（20）長野吉彰『シリーズ・私を語る　生涯稽古』熊本日日新聞社，1994。
（21）西日本新聞社『済々黌物語』1972a。
（22）―――『江原人脈』1972b。
（23）―――『八高群像』1973。
（24）昭和17年鹿本中学入学同期会『鹿中の青春　還暦記念44回・45回生の記録』1991。
（25）双黌会（済々黌昭和21・22年卒同窓会）『双黌会　思い出の記』1998。
（26）山崎貞士『シリーズ・私を語る　幾山河』熊本日日新聞社，1995b。

その他の参考文献・資料

（1）荒巻正六『学校文化―その源流と課題―』福武書店，1990。
（2）黄　順姫『日本のエリート高校―学校文化と同窓会の社会史―』世界思想社，1998。
（3）二見剛史「加治木中学校（旧制）と谷山初七郎」『鹿児島女子大学研究紀要』第15巻　第1号」，1993，255-276頁。
（4）疋田春良「戦時体制下の中等教育―愛知県における一事例―」『社会科学会論集』第30号　愛知教育大学社会科学会，1990，139-177頁。
（5）伊藤彌彦「日本近代中等前期教育の形成と展開」『国際比較・近代中等教育の構造と機能』名古屋大学出版会，1990，293-326頁。
（6）野地潤家「文集「健鯉」の考察―中等作文教育史研究―」『広島大学教育学部紀要』第二部　第28号，1979，1-11頁。
（7）塚野克己『長崎の青春　旧制中学校・高等女学校の生活誌』長崎文献社，1998。
（8）山下正寿・千葉昌弘「近代以降高知県における中等教育の歴史的展開と自治活動―高知県中等教育史研究序説―」『高知大学教育学部研究報告』第1部　第41号，1989，87-104頁。

《付記》分析資料の引用に際しては，旧字体の一部は新字体に改め，句読点や濁点を付した。

（広島大学大学院）